



ご注意ください。

---

---

この作品はフィクションです。

実在の人物、団体、事件とは一切関係ありません。

---

子供の頃の鮮明な記憶ってある？

オレには5歳以前の記憶がない。

親が言うには小さいとき頭を強く打って倒れたことがあったらしくそれが原因だそうだ。

別にそんな小さい頃の記憶など無くても別に不自由はないし思い出せたからと言ってどうってことでもない。

だから進学する大学が記憶が無い頃に住んでいた町にあると知った時も別になんとも思わなかった・・・

そして実家を離れ大学に進学してもうすぐ1年が経つ。

そんな頃実家の父親から携帯に連絡が入った。

普段連絡などよこさない父なので少し驚いたが大した話では無かった。

何でも十数年ほど海外で仕事をしていた叔父が叔母の出産を機に日本に帰ってくるので引っ越し祝いを父の代わりに渡して来て欲しいというのだ。

叔父の住む家はオレの通う大学から2駅ほど離れたところにあるらしい。  
そんなに離れた場所でもないし引越しの祝い金はオレの口座に振り込んでおくと言うので別に構わないと父には言っておいた。

本当はウチの親達が持っていかなければいけないんだろうけど  
実家は他県にあるので叔父の家までは結構距離がある、オレが行くのが無難なところだろとそう思ったのだ。

叔父とは小学生の時以来会っていない。  
確かその時は叔父夫婦の結婚式だったと思う、正直もう顔も覚えていない。

あまり会いたいとは思わないがこんなに近くに居るのなら大学在学中に何かと世話になる事もあるかもしれない。

叔父の家には明日の夕方、バイトを終わらせた後にでも寄ってみる事にした。  
父親に聞いた叔父の家の住所をパソコンで検索すると思ったよりも込み入っているようだ、

迷えず行けるだろうか少し不安になった。

翌日、大学で午前の講義を受けたあと13時からバイト先に顔を出して6時まで仕事をこなす、

こう見えても大学生の一日は忙しい。

バイトを追い叔父の家の最寄の駅についた頃には7時半を回っていた。

6時半くらいには行けるかと思って電話とかしておくのを忘れてたが大丈夫だったか・・・

まあ行って引っ越し祝いを渡して少し世間話するだけだしそんなに時間もかからないから大丈夫  
だろと

思い直しプリンターで印刷した地図を片手に歩き出してみる。

実際に来てみると路地が入り組んでいて似たような家が多い事もありどこを歩いているのかわか  
りづらい。

更に外は暗くなってきて明かりは外灯と民家から漏れる明かりくらいだった。

地図を何度も確認しながら歩いているとふと小さな公園が目に入った。

どこにでもあるような公園だったがゾウの形をした滑り台が印象に残った。

あの滑り台見たことあるような・・・そう、ずっと前に・・・。

忘れてしまった幼い頃の記憶だろうか、曖昧だがどこか懐かしいような気持ちになる。  
もしかしてオレは前にも叔父の家に来たことがあったのだろうか？

その思いは公園を通り過ぎた曲がり角を曲がった先で更に強まった。

そこには叔父の家があったのだが、その外観に見覚えがあったのだ。  
古いながら作りはしっかりしている2階建ての日本家屋、そして表札にはオレと同じ「相川」の性が刻まれている。

1階の大きなサッシの窓からは明かりが漏れていた、留守などではないようだ。  
チャイムを押してみる、家の古い外観のと同じで音声での応答など出来ないタイプの古いチャイムだ。

ピンポンという音がしてしばらくすると引き戸式の玄関が少しだけ開きそこから女性の顔が見えた。

「どちら様ですか？」

少し警戒した感じの声で女性は聞いてくる。

「夜分遅くすみません、相川学の甥の勇介ですが叔父は居ますでしょうか？」

「えっ？学さんの甥っ子の勇介君？ちょっと待ってね」

そういうと女性は奥に戻っていった、叔父を呼んでいるのだろう。

さっきの女性が叔母なのだろうか、大分お腹が大きかったからか少し動きにくそうだった。  
叔母が開けた引き戸から家の中の様子がうかがえた。

玄関のすぐ側に古臭い2回への階段が見える、その階段から年の頃6～7歳くらいの女の子がこちらを見ていた。

恥ずかしいのか、顔半分を階段の取っ手で隠しながらじっとこちらを窺っている。

軽く手を振ると少女の顔は少しだけほころんだ、その時に1階の奥から叔父が出てきた。

「おお、勇介か？大きくなったなあ一急に来たからびっくりしたぞ、兄さんは一緒じゃないのか？」

「いえ、父に頼まれてお祝いもって来ました」

「そうかわざわざすまなかったな、さあ上がってくれ」

そうやって叔父に奥に上がるように促された、

さっきの少女が気になりふっと階段を見上げると急いで階段を急いで上がる音だけが響いた。

「ああ、気にしないでくれ、いつもの事なんだ」

階段を見つめるオレに叔父は何処と無くばつが悪そうにそう言った。

あの少女は人見知りか激しいのだろうか？小さい頃は誰だってそうか……

そんなことを思いながら叔父に促されてリビングへと入る。

「ごめんなさいね、まさかお客が来るとは思ってなかったからもう食事済ませちゃったのよ」  
そう叔母が言いながら食べた後の食器をいそいそとテーブルから片付けていた。  
「簡単なものでもすぐ作っちゃうから少し待っててね」  
そういうと叔母はキッチンへと行ってしまった。

久々に会った叔父は昔より痩せた印象だった、歳は離れているがやはり父親に何処と無く似ている。  
叔母も優しい感じの人で身重の体にも関わらず良く気を使ってくれているようだ。

家の中は食器以外もまだ片付いておらずダンボールがあちこちに積み上げられたままだった。  
引っ越してきてまだ間ものない感じだ、元からあったと思われる家具たちには白い布がかけられていた。  
家具に積もった埃から長い間この家が使われてなかった事がうかがえる。  
その布の隙間から子供のおもちゃや襖に描かれた落書きなんかが見え隠れしていた。

「まだ片ついてないんだ、引っ越してきてもうすぐ1ヶ月にはなるんだが中々はかどらなくてな」  
部屋の様子を見回していたオレに気づいたのか叔父はそういうと頭をかきながら苦笑いをしてみせる。



「いえ、こちらこそすいませんでした急にお邪魔してしまって」

「いや別に構わないよ、兄さんから勇介がこっちに居るって聞いてたから落ち着いたら会いに行こうかと思ってたんだ」

「こうやって会うのも久しぶりだろ？俺達の結婚式以来だったか？もう結構経つしな」

「こっちの大学通ってるんだって？一人暮らしはもう慣れたか？」

ふたりでソファに座るとそんな調子で叔父と会話は進み、久々の対面は思っていた以上に和やかに進んだ。

「もう、学さんたらそんなに質問攻めにしちゃかわいそうよ」

そう言いながら叔母が料理を運んでくれた。

「ははは、久々に会ったんでな聞きたい事ばっかさ」

「そういえば勇介はもう二十歳だったろ？ビールぐらい付き合えよ」

「はい、いただきます」

酒は強い方ではないが断れるような感じでもなかったので叔父の晩酌に付き合うことにした。

「嫁さんはお腹大きいから今飲めなくてなぁ丁度晩酌の相手が欲しかったとこだったんだ」

そういいながら叔父は冷蔵庫からビールをとりだすとコップについでよこした。

ビールを飲みつつ叔父の海外での仕事の話や最近の日本の事など色々話した。

そんな中で叔父が変なことをポツリとつぶやいた。

「お前この家は久々だろ、無理して来なくってもよかったんだ・・・連絡さえしてくれればこっちから行ったのに」

無理してもってほどの事では無いと思うのだが叔父は妙に神妙な顔している、そのことに違和感を感じた。

「別に電車で二駅ですしそんなに遠くもありませんでしたから」

「いや、その・・・そういう意味じゃなくってさ・・・ほらお前はこの家には何かと嫌な思い出の方が多いだろうと思ってさ」

「嫌な思い出ですか？オレ子供の時に来たことあるんですかね？子供の頃のことはよくおぼえて無くって」

オレのその言葉に叔父は叔母と顔を見合わせ何か気まずそうな顔をしている。

「なんかオレ変な事言いましたか？父が言うには昔頭を打ったとか何とかで子供の頃の覚えて無くって」

そう急いで取り繕うと叔父は少し顔をしかめて頭をポリポリとかいて下を向いてしまった。

「そうだったか・・・いや気にしないでくれ少しオレも酔っ払ったみたいだ、ははは」

そういうと先ほどの会話がまるで無かったかのようにほかの話題で盛り上がった。

オレは子供の時この家でなんかあったのだろうか・・・

もしかしたら子供の時頭を強く打ったのはこの家でだったのかもしれない。

何となくだがそんな気がした・・・そういえば先ほどから頭が少しだけ痛い・・・頭痛がする・・・ビールを飲みすぎたか。

そんなことを考えているうちにリビングにかけられた古臭い鳩時計が11時になったことを告げていた。

「すいません、こんな遅くまでお邪魔してしまって」

そういいながら席を立とうとするが酔いがまわったのか上手く立ち上がれない。

「はは、お前顔真っ赤だぞ大丈夫か？お前は兄さん似だな兄さんも酒に弱かったしな昔から」  
そう叔父がいうと腕を引っ張って体を支えてくれた。

「もう今日は泊まっていきなさいよ、夜も遅いし明日は学校お休みでしょう？」

そう叔母が心配そうに言うと叔父も泊まっていくように薦めてくれた。

「そんな酔っ払って怪我でもされちゃ兄さんに申し訳ないからな大事な大事なひとり息子なんだし」

「二階に部屋も空いてるし今日は泊まって行け、布団が押入れの中に入ってるからそのぐらい自分でしけるだろ？」

最初はそこまでお邪魔するわけにはと思ったがやけに頭が痛くなってきてまともに歩けそうにない。

明日は日曜だし、お言葉に甘えて泊めてもらおうと考え直した。

「すいません何から何まで・・・まさかこんなに酔うとは思わなくて」

「いや良いんだ、二階はちょっと掃除できてないから埃っぽいのが気しないでくれ階段の突き当たりの部屋を使ってくれ」

「はい、じゃあすいません、お言葉に甘えて・・・二階をお借りします」

そういうとふらつく足でオレは階段を上がっていった。

後ろで叔母が心配そうに『大丈夫かしら？』と言っているのが聞こえた。

なぜだろ今までこんなに酔っ払ったことなどないのだが・・・階段を上る一步一步が頭に響く。二階に着くと部屋が二つあった、突き当たりの部屋だと叔父が言っていたななどと思っていると隣の部屋からテレビの音が聞こえてきた。

さっき見たあの女の子がテレビでも観ているのだろうか？あの子とは前に会っただろうか・・・何故か見覚えがあった。

部屋に入ると押入れから布団を出したがろくに敷きもせずその上に寄りかかった。あまりの頭痛の酷さに気絶でもするようにオレの意識は遠のいていった。

頭が痛い・・・まるで頭が割れたかのようだ・・・ぼんやりとした意識の中オレは目を覚ました。あれから時間はどれだけ経ったのだろうか、周りはシーン静まり返っている。窓から見える満月の照らす月明かりで部屋の中は思いのほか明るく感じられた。恐らく深夜なのだろう、となりであの少女がテレビを見ている音もしていない。引かない頭痛にオレはそっと頭に手を伸ばした。

一瞬ぬるっとした感触と額を伝う生暖かい液体に驚いて両手を月明かりに照らしてみる。  
そこには真っ赤に血で染まった手があった・・・

ハッとして体を布団から起こしてもう一度両手を確認してみるがそこには血などついてはいない。

なんだ寝ぼけたのかそう思った時だった。

視界隅にあの少女の姿が映った、少女は部屋の入り口に立っている。  
引き戸を開けた音などしなかったが・・・いつ入ってきたのだろうか。

少女はゆっくりと口を開いてこう言った。

「お兄ちゃん、頭が痛いの？」

「ああ、そうなんだお酒を飲みすぎちゃったみたいだね」

「ふ～ん」

「もう遅いから寝ないとだめだよ？」

そうたしなめると少女は少し困ったような顔をした。

「あのね、さっき怖いテレビ見ちゃったの、そしたら怖くて寝れないの」

「お母さんに一緒に寝てもいい？って聞いたけどダメだって」

「お姉ちゃんなんだからひとりで寝なさいっていうの」

「そっか、怖いテレビ見ちゃったのか」

「うん、少しだけお話しててもいい？眠くなるまで・・・」

そういうと少女はその場に膝を抱えるように座りこんだ。

頭は相変わらずガンガンと痛むがなんだかこの少女の事が気にかかった。

「あのね、お母さんとお父さんこの家きらいだって言ってた」

「え？お父さん達がこの家嫌いだって？」

「うん、この家から引っ越すって言ってたよ」

変な話だった、1ヶ月前に叔父夫婦はこの家に来たばかりのはずだなのにこんなにすぐ引っ越すなんて。

それにさっきはそんな事一言も言ってなかった。

「どうして引っ越しちゃうのかな？」

そう少女に尋ねると少女は悲しそう顔をして言った。

「この家は気持ち悪いだって・・・昔ここで人が死んだから・・・ここには住みたくないって」

「私はこの家が好きなの、だから引越ししたくないの」

そういうと少女は自分の膝をぎゅっと強く抱き寄せた。

この家で人が死んだ？なんの事をいっているんだろうか・・・

そんな話いままで両親からも叔父からも聞いたことなどない。

その時先ほどの叔父言葉を思い出した。

『お前はこの家には何かと嫌な思い出の方が多いだろうと思ってさ』

嫌な思い出？あの時はなんの事かさっぱりわからなかったがもしかして

その人が死んだという事とオレの間になにか関係があるのか？

そんなことを考えていると少女が近づいてきてこんな事を言った。

「あのね私ね、弟と喧嘩しちゃったの・・・ずっとずっと仲良しだったのに」

弟？叔母のお腹にいる子の事だろうか？それとももうひとり子供が居るのか？

「なんで喧嘩しちゃったの？」

そう少女に聞くと悲しそうな顔でうつむいたまま話し出した。

「パパとママがお出かけするから弟と一緒に留守番してたの」

「いつも一緒に観てるアニメを観るつもりだったけど時間になっても始まらなくて弟がね、怖いテレビ見たいって言うから私は見たくないって言ったの」

「でもどうしても観たいっていうから喧嘩になっちゃって・・・私リモコンかくしちゃったの」

どこかで聞いたような話だった、確かこの後喧嘩した姉弟は・・・

思い出そうとすると頭がズキズキと痛み出した、まるでこの話の結末を思い出させないようにするかのよう。

そうだ、俺はこの話を知っている・・・確かこの後・・・弟が姉を・・・殺すのだ・・・

その日、弟と姉は急な親戚の葬式に行った両親の代わりに家ではじめての留守番をすることになった。

普段から仲が良く何をすでも一緒だった姉弟・・・だけどあの夜だけは違った。

いつも観ているアニメが野球中継の延長で放送が遅れその間に観ていた怖い心霊番組の続きが気になって弟は続きをみるとダダをこねた。

怖いものが苦手だった姉は怒り出してテレビの電源を切りリモコンをどこかに隠して1階に下りて行ってしまった。

どうしても続きが気になった弟は姉のあとを追いかけて階段を降りようとしていた姉の背中を・・・

・・・誤って押してしまったのだ。

「そう、そして背中を押されたその女の子は階段を転げ落ちて頭を強く打ったの・・・」  
姿は変わらず少女のままだが声が、まるで先ほどの少女のものとは思えない大人の声で少女は喋り始めた・・・

「ようやく思い出してくれたのね、勇ちゃん」

「・・・姉さんなの？」

そうだ、そうだった・・・思い出した・・・この家のこともこの家で起きたことも全部。  
元々この家は俺たち家族が住んでいた家だった、そしてオレが5歳、姉が6歳だったあの夜

オレはこの手で姉を殺してしまったのだ。



両親が帰ってきた時には姉は階段の下で頭から血を流して死んでいた。  
母親があげた悲鳴で二階に居た俺はそのことに気づいた。  
親や警察に何度も何度も聞かれたが俺は怖くなって何も知らないと答え  
結局姉が足を滑らせて落ちた事故としてかたづけられた。

そして両親は姉のことを忘れるために他県へ引っ越したのだ。

もしかすると両親はオレがやったことに気がついていたのかもしれない。  
まだ幼かったオレに姉のことを一切ひた隠しにしていた。  
小さい頃に頭を打ったのはオレじゃなく姉の事だったのだ・・・。  
そしていつしかオレは姉のことも自分が殺したことさえも忘れてしまっていた。

「酷いよね、勇ちゃんは・・・階段から落ちてもずっと勇ちゃんのこと呼んでたのよ？」  
「何度も何度も勇ちゃんのことを呼んだわ・・・頭が痛い頭が痛いって助けってって」  
「でも勇ちゃんは知らんぷりするんだもん、そしてこの家からも居なくなっちゃった」  
「パパもママもみーんな居なくなっちゃった・・・私だけ置いてけぼりにして」  
「でもきっと迎えに来てくれるって信じてた、やっと来てくれたと思ったら私のこと忘れちゃっ  
てるんだもん酷いよ」

「姉さん・・・オレ・・・姉さんになんてことを・・・」  
「いいの、怒ってないよだって迎えに来てくれたもん、また一緒に暮らせるよね？」  
そう言うと姉はにっこりと笑って見せた・・・その笑顔見ると自分が犯した過ちから救われた気  
さえした。

そうだ、叔父夫婦がこの家を出て行ったら俺がこの家に住もう、そして姉さんと一緒にこの家で暮らすんだ。

大学もここから通えばいい、もうこれ以上姉さんに悲しい思いをさせたくない。

小さいままの姉の体を抱き寄せオレは言った。

「ああこれからは一緒だ、一緒にこの家で暮らそうふたりで」

「もう裏切らないでね？ひとりにしないでね？約束だよ？」

そういう姉にオレは絶対にひとりにしないと誓った。

翌日、叔父と叔母にそれとなく引っ越しのことについて聞いてみた。

ふたりはなぜ知っているのかと驚いたようだったが話しているのが聞こえたといって誤魔化した。

やはり誰も居ない二階から子供の話し声や物音が聞こえてくる事があり気味が悪いから引っ越すと言う話だった。

それから程なく叔父夫婦が引っ越した後オレは借りていたアパートを引き払いこの家に移り住んだ。

元々この家はオレの家だったのだ、柱の傷ひとつにも思い出があった。

姉との懐かしい思い出・・・よくこの柱でどっちが背が伸びたかを計ったっけ。

だが寂しくはない、今は姉さんと一緒なのだから・・・

オレは姉さんとの生活を楽しんでいて、夜な夜な懐かしい昔の思い出話で盛り上がった。

だがたまに姉さんは寂しそうな顔をする時があるのが気に掛かっていた。

「姉さん、ごめんオレがあの時あんなことをしなければ姉さんは今頃・・・」  
「もう勇ちゃんはそればかり、そのことは怒ってないっていつてるでしょ？」  
「でもさオレ・・・姉さんに申し訳なくって」

そうやって姉を抱きしめると姉は静かな口調でこう言った・・・

「私が怒ってるのはね？・・・私の事を忘れてしまったことよ・・・」  
「だからその罰にずっとこの家でいっしょに暮らしてもらおうわ、永遠に・・・」  
「え？」

そういうと姉はその姿からは想像できない強い力で俺をズルズルと引きずり階段の上に連れて行った。

「姉さん、何するの？ねえ・・・姉さん！」  
いつもと違う雰囲気姉に嫌な予感がした、背中が寒い、全身から冷や汗が拭きだす。  
「だいじょぶよ、何もしないわ・・・ただもう二度と私を忘れないようにするだけ」  
そういうと姉はいつもと同じようににこりと笑って見せた。

俺はそんな姉が怖くなって口早につぶやく。

「忘れないよ、忘れる訳ないだろ？」  
「だって忘れてたじゃない、私の事も殺した事も・・・」  
「それは、小さかったから・・・」  
「ふふ、そうね・・・でも安心して、もう二度と忘れる事はないわ」  
「だって自分を殺した相手は永遠に忘れられないものだもの、私がそうだったみたいに」  
そういうと姉は階段の一番上からそっと俺の背中を両手で押した・・・

階段を転げ落ち、ありえない角度に曲がった首で頭をささえる事もできず俺は

階段の上に立つ満面の笑みを浮かべる姉の顔を見上げていた。

そこに立っていたのは俺の知る幼い姉の姿ではなくまるで別人のように変わり果てた見た事も無い醜い女の姿だった。

今となってはアレがほんとに姉だったのか、姉の姿をした何かだったのかそんな事はもうわからない。

ただ意識が朦朧とする中頭に過ぎるのは姉を殺してしまった後悔と罪の意識だけだった。

階段脇に設けられている小窓から月の光が漏れている。

今夜も月が綺麗だ・・・それにしても・・・ああ、頭が割れるように痛い・・・。

その後連絡が取れなくなった息子を心配し両親がこの家を訪れたのは3ヵ月後の事だった。玄関を開けるとそこには姉の時と同じ姿で横たわる息子の姿があった。だが明らかに姉の時とはひとつだけ違う点がひとつだけあった。

血でついた小さな手形がふたつ、まるで背中を押すようにしっかりと憑いていた事だった。

その家はその事件の後すぐに売り払われた、今では誰がその家に住んでいるのか誰にもわからない。